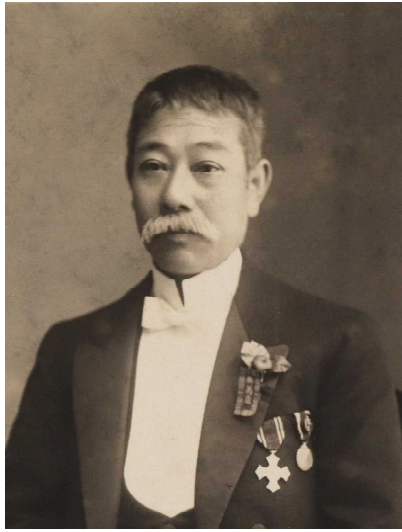


なか の また ざ え もん  
五代 中埜又左衛門



中埜又左衛門 (1864 ~ 1919)  
写真提供：(財)招鶴亭文庫

堅実に判断して、寡占化の状況を見て取ると、損切を判断して売却した。この事業への投資は、短期的には赤字だったが、長期的には「発酵技術の近代的な製造法(機械化)」への脱皮に役立ったと云える。

五代目は、近代的な設備である蒸気缶、汽機、圧搾機を小規模工場で試験導入し、大正期に入ると、本社の工場内の機械化を進めた。動力源のボイラーの設置、原料輸送用のエレベーター、自社開発の醪圧搾機、醪搾汁輸送用ポンプ、汲水用の「ポンプ」、「自家電燈用発電機」の本格導入への投資は惜しまなかった。

五代目は、現状に満足するはなく、堅実に次の事業展開を見据えて、技師をドイツ醸造協会へ留学させ、速醸法を研究させた。技師の帰国後、1902(明治35)年「醸造試験所」を設け、さらに酢の瓶詰化を行い、かつ、販売に特化した中埜商店(他社製品をも扱う)設立による販路の拡大につなげた。

### ■ミツカン酢の全国展開を果たす

この醸造試験場で開発された「米酢」の製法の確立によって、ミツカン酢は関西方面への進出を果たすことになる。関西圏は、「米酢」の食文化圏である。最も得意な「粕酢」ではなくて、新技術をもって製造する「米酢」での進出は、五代目中埜又左衛門の守成、堅実主義とは裏腹な感を呈するが、果敢な行為だったと云える。

関西へ進出後は、10年ほどの間に、創業以来の江戸で売り上げた石高を達成してしまうほどであった。

また、五代中埜又左衛門は、東京の食酢工場の共同経営に参加し、東京での生産基盤の確立を目論んでいたが、製造会社を設立した年に他界した。

(杉山清一郎)

## 堅実守成の人 — 酢醸造法の近代化を推進 —

### ■ 生い立ち

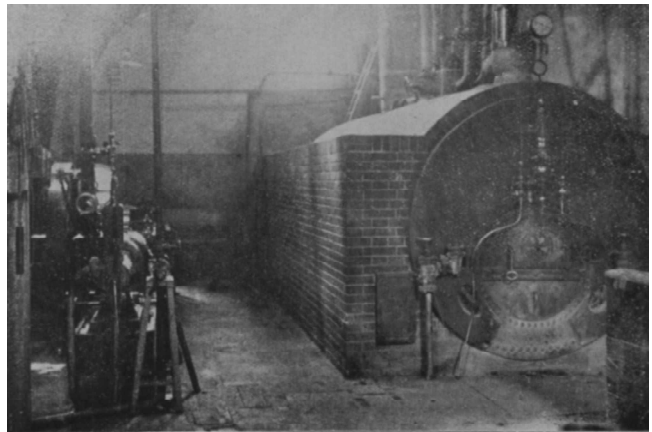
中埜政助(五代中埜又左衛門)は、父中埜半六の二男として1864(元治元)年、愛知県半田市で生まれた。四代中埜又左衛門には男子がいなかったため、中埜政助は中埜又左衛門家の養子となり、五代中埜又左衛門を1898(明治21)年に襲名した。

中埜政助は、地味な性格で、自ら先頭に立って華々しい活躍をするという性向の持ち主ではなかった。

### ■ 発酵技術の近代化を計る

五代中埜又左衛門は、明治三十年代に入ると、中埜銀行、中歴貯蓄銀行、知多瓦斯等の新会社を設立、最大の出資者でありながら事業を引っ張っていかうとはしなかったため、消極的と見られた。

カプトビールは、先代(四代目)が、研究を始め、事業化に要した期間、金高を考えると、撤退という行為には誰も手出をしたくないはずである。しかし、五代目は



機械化のエネルギー源として作動した「原動機室」  
右はボイラー(蒸気缶)

写真提供：(財)招鶴亭文庫



事業の全国展開で設立した尼崎支店の工場

写真提供：(財)招鶴亭文庫